

1654 谷住郷地域コミュニティ交流センター

【キーワード】

〔施設種別〕高齢者施設 障がい者施設 子ども施設 住宅（地域コミュニティ交流センター）
〔運営主体〕市区町村 法人 NPO 個人（補助金）内閣府 国土交通省 厚生労働省（）
〔建物形式〕1棟単体型 複数棟集合型 団地型（建物状況）新築 増築 改修 一部改修 既存
〔対象者〕高齢者 障がい者 子ども ファミリー 多世代



写真1. エントランス

高齢化率45%と少子高齢化が進んでいる地域のコミュニティ交流センター。元々保育所だった施設を転用し2021年に移転した。地域住民の活動の場のほか、地元小学生と地域住民の交流を図る「すみえっ子クラブ」がある。子ども向けの事業は地元住民が積極的に行い、その事業の中心としても活用されている。2022年4月から、より利用しやすくするための改修工事を行うため、まだ保育所の名残がある。

■施設概要

所在地：島根県江津市桜江町谷住郷1824-1

アクセス：JR山陰本線（米子-幡生）江津駅 車20分

施設種別：地域交流センター

開館時間：8:30~17:30 月～金

インタビューでお話を伺った方：今田絵里花様

地域マネージャー 今田 絵里花様

訪問日：2022年3月28日

訪問者：山田あすか、土田寛、荻原雅史、村川真紀、池上柚月

（こちらの記録をベースに、以下にまとめる）

1. 島根県江津市について

島根県江津市は、山陰地方の中では最も人口が少なく、県内で最も面積が小さい市である。また東京からの移動時間距離が全国で最も遠い都市としても知られている。高度経済成長期以降は、都市部への人口流出が増大し、年々人口減少が進んでいる。一方で、中国地方一の大河や海水浴場などをもち、多くの緑で囲まれ、自然あふれる地域である。

谷住郷地域コミュニティ交流センターが位置する場所は、小さな集落が合わさった地域で、畑や家も周辺に集まっており、落ち着いた雰囲気のある場所である。

■運営概要



写真2. 位置情報

google mapでは、以前の位置に記されているが、現在の位置は丸い円で囲まれている位置にある。

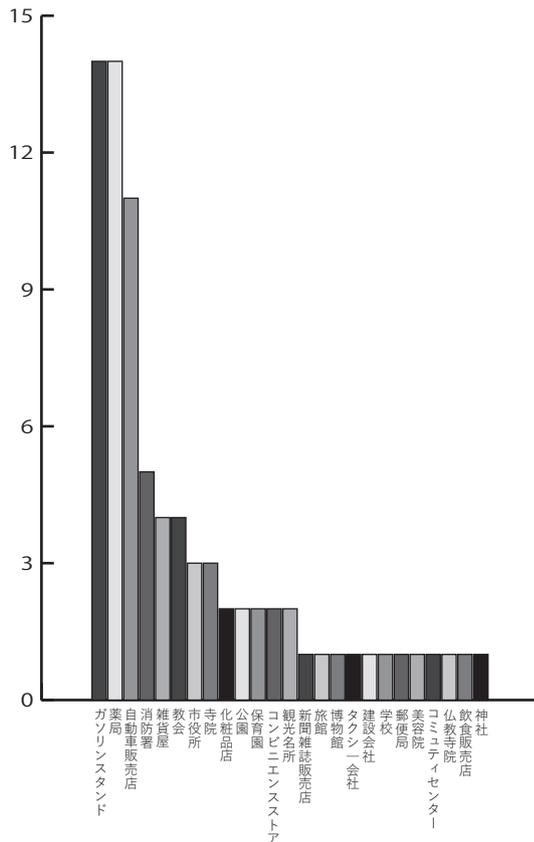
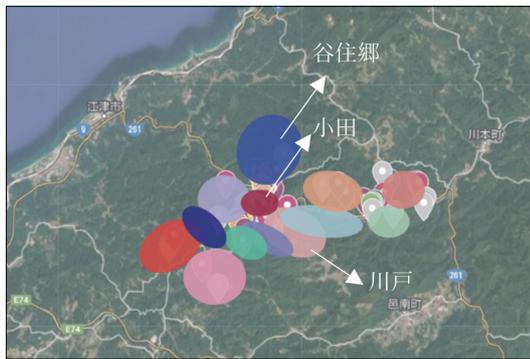


図1. 江津市の施設の種類と店舗数

※飲食販売店は、カフェや個人店、スーパーマーケット、直売所なども含める。



©2022 TerraMetrics.

図2. Google map の施設と地区

運営はセンターを中心とした、まちづくり協議会(部会:教育文化部、産業環境部、地域振興部、健康福祉部)があり、その中の教育文化部の方々が、こどもたちの事業を行っている。高齢化が進んでいるが、現在でも継続して行われている。

公民館事業として所管が社会教育から地域振興部へ動いた。地域マネージャーである今田氏は地元住民の中から、地域の住民に推薦され現職にある。

■桜江町全体について

元は島根県邑智郡桜江町という名称であり、その後平成の大合併により2004年に島根県江津市桜江町となった。現在、江津市桜江町としてある地区は全部で5地区である。全地区を対象に、施設種別と施設数を整理した(図1)。小学校、中学校は共に1校ずつであり、各学年1クラスである。令和3年現在小学校の児童は106名、中学校の生徒は51名在籍している。

郵便局は、谷住郷、市山、長谷、川越地区の4箇所があり、川戸地区には簡易郵便局がある。コミュニティセンターは桜江5地区(川戸・谷住郷・川越・市山・長谷)それぞれ1箇所ずつある。全ての施設をGoogle mapで示す(図1)。谷住郷南側、小田、川戸地区周辺には小学校・中学校・消防署・コミュニティセンター・郵便局、スーパーマーケット、コンビニエンスストア等生活サービス機能が集約している。

コミュニティセンターは昔の小学校区ごとに設置され、公民館を引き継いでいる。そのため、昔の小学校を利用している事例が多い。

■谷住郷地域コミュニティ交流センターの施設について

小学校が閉校し、その後公民館(文科省:社会教育施設)として利用され、6年前に地域コミュニティセンター(総務省:市が直営で行っている)へと変わった。地域からすると施設に求める役割は同じであるが、運営側は今でも公民館と地域コミュニティのセンターの差異を手探り状態で試行錯誤しながら運営を続けている。

移転理由は、現在利用している建物が元保育所(市営)だったが園児が11人と減少し、川を渡った桜江保育園(民営)には園児が50人~60人ほど在籍していたため、保育所を桜江保育園へ合併する形で保育所が無くなり、保

育所の施設に地域コミュニティ交流センターを移転する形で運営を開始した。元々地域コミュニティ交流センターがあった建物は閉校した小学校を利用していた。築63年と古く、周辺で初めて建てられた鉄筋コンクリートの施設であったが、2階は雨漏りや動物が入ってしまうこともあった。地域の神楽団があるため、閉校した小学校の体育館の利用は継続している。

保育所時の計画のまま利用しているため、大人用トイレの数が少ないなどの課題があり、地域コミュニティ交流センターとしてより利用しやすくするための改修工事が2022年4月から入る予定である。そのため2021年の見学訪問時時点では、保育園として計画された空間をそのまま活用している。

■谷住郷地区に住む子どもや住民について

全員で400人の地区であり、高齢化率は45%（65歳以上）と、市の中では比較的高齢化率が高い地域である。地区にこどもは15人いる。「本当は違う地区だけど、おじいちゃんおばあちゃんがいる」との理由で、他地区からこどもが（3人ほど）来ることもある。そのようなケースを含め、計18人の子どもたちは、小学校の振替休日などに本センターに集まり、お茶を作る活動や神楽団の子供教室など、地域の人と交流する行事に参加している。

小学校は、桜江の1学区で1校である。川を渡った地域の川戸地区に住んでいる児童は徒歩で通い、その他の地区の児童達はスクールバスで通っている。

中学校は現在50人ほどであるため、部活動の種類が減り、2021年には野球部が廃部となった。そのため、野球をやりたい生徒は野球部がある地域外の学校に通うため、生徒数は減少の一途をたどっている。

高校は、江津まで通う生徒や、川本町の学校へ通う。通学手段は、学校側から通学バスが出ている。しかし、バスが出ていない高校もあるため、両親が送り迎えをしている場合が多い。谷住郷地区は昔、三江線という汽車が通っていたが水害が多い地区という理由や利用者の減少により、廃線になった。また、江津市へ向かうためのバスは片道で700円ほどかかり、かつ利用者が減少したため、運行本数が減り、学生が通学に利用できる時間帯のバスは朝に1本と夕方に1本のみである。ほかに江津駅とを結ぶ4本のバスも運行しているが、後述の「生活



写真3. 館内①廊下

高い吹き抜けにより開放感があり、木の現しがあたたかみある雰囲気を醸成している。

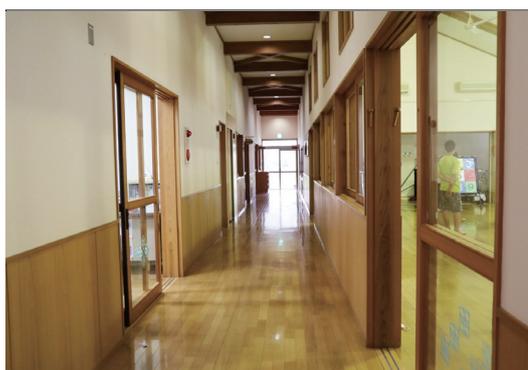


写真4. 館内②廊下

写真右側が広い室内空間であり、訪問時はここで数名の子どもたちが遊ぶ様子が見られた。左側の扉が受付兼事務室であり、子どもの様子を見守ることもできる。



写真5. 館内③遊戯室

屋内遊戯室は十分な広さがあり、自由に遊び、過ごすことができる。



写真6. 館内④

保育所当時の室名サインなどがそのまま残っている。



写真7. 館内⑤各教室の様子

畳敷きの部屋（写真上・中）や会議室様のレイアウトの部屋（写真下）があり、それぞれ会議や教室などのイベントで目的に合わせて使われている。保育所として利用されていた当時の棚などの什器もそのまま残っており、活用されている。

バス」とのアクセスがスムーズでないため、利用者は少ない。このように、生活の上での公共交通機関の利便性にやや難がある。

■谷住郷地区の合併の影響

今の谷住郷地区は江津市桜江町だが、平成の大合併までは、邑智郡桜江町という地名であった。合併にあたり役場は市役所の支所という位置づけになり、職員数の削減があった。邑智郡桜江町役場では30人程度が勤務していたが、支所となってから職員が6人程度となった。

■地域施設やサービス

交通網については各所の小さい地域から「生活バス」としてバスが出ている。駅まで向かい、駅から交通バスを利用する仕組みだが、生活バスと他の交通バスの乗り換え時間がかみ合わず不便を感じている。

公共施設や行政関連の施設に関しては、元の役場の名称が市役所へと変更になった程度で、内部的には以前と大きな変化はない。買い物は、移動販売車生協、さくらんぼのお家（配達）、川を渡った場所にあるスーパーマーケットなどを利用している。遠くへ買い物をする際は、車を利用するため、高齢者でも車を運転する人が多い。また、介護福祉系サービスに関しては川戸地区にはデイサービスがあるが谷住郷地区にはない。

病院は桜江町内に1つあり、高齢者は徒歩圏内での移動が難しいため、「生活バス」等を利用して移動する。しかし、バスの時刻などが受診時間と合わないことが多く不便を感じている人もいる。医師も減少している。

■地域コミュニティ交流センターでの活動

交流センターでは、高齢者が主に活動する草木染めやグランドゴルフ、青年が主に活動する神楽団、地域の女性たちが活動するフォークダンスなど、世代によって様々な活動を行っている。植物画教室では多世代が参加して活動が行われている。それぞれの活動は約10人程度で行っており、神楽団は地域行事であることから、他の活動に比べやや多い人数で行われている。

小学校の振替休日に子どもたちと地域住民の交流イベントが企画されるようになった経緯は、地域コミュニティ交流センターになる以前の公民館の時代に、子どものこ

とや社会教育を積極的に行う前任者により、地域でこどもを育てたいという思いによって企画・運用され始めた。現在でも当時の流れをくんで活動を続けている。

地域が運営する「夜桜まつり」では、神楽団が人気であり、他県含め毎年500人ほどが集まる。新型コロナウイルスの影響で2年ほど行われていないが、2022年は地域内だけで実施する予定であり、準備を進めている。

■生活の移動手段

生活の上で必要な施設の多くは川戸地区に集約されている。ほとんどの住民は車を利用しているが、高齢になり運転や徒歩での移動が難しくなると、近所の住民の車に乗せてもらっての移動や、デイサービスの利用、市内に家族が住んでいる場合は、週に1度買い物をして家まで届けるなどの福祉サービスを活用しながら地域住民同士で協力して生活している。高齢者は元気な方が多く、車での移動が便利なこともあり、80代でも車を運転する方が多くいる。現在でも地域運営の主力は70代後半の住民である。

(東京電機大学 池上柚月、村川真紀 2022.7.9)



写真6. 館内④給食室

以前保育所だったこともあり、今年の4月から改修工事が始まるため、保育所のままで利用されている。トイレなども幼児用のトイレのままである。給食室はイベントで調理をする際に利用している。

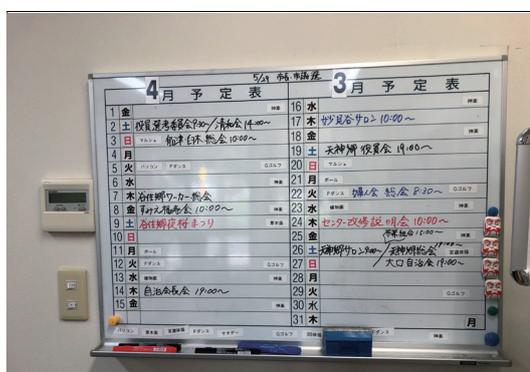


写真7. コミュニティセンターの予定表

ほぼ毎日何かしらのイベントや教室、地域活動の打合せ場所として利用されている様子が分かる。

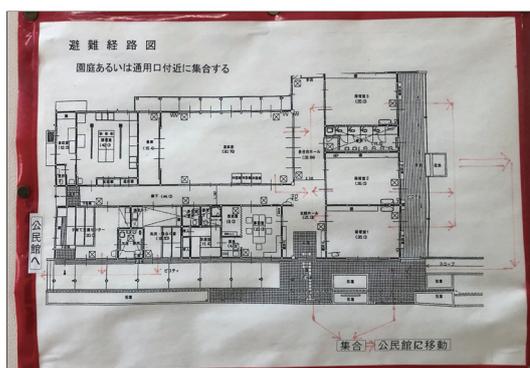


写真8. 館内平面図(改修前現在)